

本部・交流ゾーンの基本コンセプトと具体化戦略について  
～「新たな大学像を求めて」（タウン・オン・キャンパスの形成）～

平成11年6月  
地域連携・交流WG  
WG長 森 淳二郎

地域連携・交流WGでは、平成9年度までの地域連携WGと交流ゾーンWGの検討内容をふまえ、地域連携・交流に関する重要な課題について多角的な検討を行った。ここで、本部・交流ゾーンの基本コンセプトと具体化戦略、及び学生の居住施設に関する検討の結果を報告する。

## 0. 本部・交流ゾーン検討の前提条件

九州大学の改革と九州大学新キャンパス計画の基本的考え方は以下とおりであり、これをふまえて本部・交流ゾーン及び学生の居住施設の基本コンセプトを設定した。

九州大学の改革の大綱案（平成7年3月30日評議会決定）

- (1) 国際的・先端的な研究・教育拠点(C.O.E.)の形成
- (2) 自律的に変革し、活力を維持しつづける社会に開かれた大学の構築

九州大学新キャンパス計画の基本的考え方（平成10年5月26日評議会決定）

- (1) センター・オブ・エクセレンスにふさわしい研究・教育施設の整備  
世界的レベルの研究・教育拠点の形成にふさわしい施設整備を行うとともに、将来の発展に柔軟に対応できる計画とする。
- (2) 環境と共生する未来型キャンパスの創造  
自然地形を残して景観資源として活用し、歴史的遺産を包摂するとともに、再生水の有効活用、省エネルギー、資源リサイクルなど環境に配慮した未来型キャンパスを創る。
- (3) 地域に開かれた魅力的なキャンパス生活の創造  
大学としての象徴性に富む景観を形成するとともに、地域に開かれた魅力的なキャンパス生活を創造する。
- (4) 新しい学術研究都市の核となるキャンパスづくりと地域連携の推進  
糸島半島を中心として福岡から唐津にいたる地域に展開する「九州大学学術研究都市」の核となるキャンパスを構築し、地域との積極的な連携を図る。
- (5) キャンパス間の連携に配慮した新キャンパスの創造  
キャンパス間の連携に配慮し、総合大学の特色を生かした高度な研究・教育が十分に機能する新キャンパスを創る。新キャンパスへの移転が段階的となることから、建設過程においても大学の運営が円滑におこなわれるような移転計画とする。

## 1. 本部・交流ゾーン検討のスタンス

- (1) 「センター・オブ・エクセレンスにふさわしい研究・教育施設の整備」に向けて  
知識創発型キャンパスの顔づくりを目指す  
九州大学がセンター・オブ・エクセレンスを目指すためには、キャンパス全体が「研究」と「教育」と「社会連携」のベストミックスした「知識創発型キャンパス」でなければならない。  
新キャンパスの本部・交流ゾーンは、このようなC.O.E.にふさわしい「知識創発型キャンパスの顔」として整備する。  
ソフトの仕組みを重視する  
大学の「知」と「創造」のイノベーションを支える上では、ハードとしてのキャンパス整備ばかりでなく、ソフトの仕組みづくりが重要である。学術研究、研究開発、教育、学産官民連携等の多様な分野におけるソフトの仕組みを創出し、上記の「知識創発型キャンパスの顔づくり」と組み合わせる

ことにより、「ひと」と「知識」と「知識の場」のベストミックスをハード・ソフトの両輪で実現する。

## (2) 「環境と共生する未来型キャンパスの創造」に向けて

九大の広範で先進的な研究シーズをキャンパス及び学術研究都市づくりに生かす

九大の研究シーズを生かして、環境と共生する未来型キャンパスづくりを行うとともに、キャンパス周辺のまちづくり、学術研究都市エリアに展開する分散型地域核("ほたる")についても、環境との共生を図る。

キャンパスを時間を超えた記憶装置とする

自然地形、歴史的遺産を包摂した未来型キャンパスとして整備するなかで、キャンパス全体を人と自然の関わり、人と歴史の関わりに関する学術・研究の発展を実体験できる記憶装置とする。このようなコンテクストのなかで、ユニヴァーシティ・ミュージアム及び図書館の現代的再評価と地域開放が構想されるべきである。

## (3) 「地域に開かれた魅力的なキャンパス生活の創造」に向けて

学生を主体に据えた視点を重視する

キャンパス市民の主役である学生を主体に据えた視点を大切にして、学生が安心・快適に学問に打ち込める最高の学舎(まなびや)環境づくりを目指す。学生の主体的意欲と創造性を引き出すために、充実した生活環境を整備するとともに、学生が自主的に研究・開発活動に参加できる仕組みづくり、知的生活環境づくりを進める。

快適で豊かなキャンパスライフを支える仕組みをつくる

学生や教職員のキャンパスライフを快適・豊かなものとするため、大学生活に必要な多様な施設・機能を学内に配置する。また、これらの施設・機能を地域に開放することで地域の利便性を高めることに貢献する。大学と地域の共同利用は、学内施設の利用効率・運営効率を高めることにつながる。

キャンパス全体を学・住・楽が複合した快適なまちとする

キャンパス全体を一つのまちとしてとらえ、高い快適性・利便性・安全性を生み出すとともに、変化と調和、安らぎと刺激などが享受できる学(研究・勉学)、住(学生・教職員居住)、楽(文化・交流)が複合した多様な空間を用意する。

## (4) 「新しい学術研究都市の核となるキャンパスづくりと地域連携の推進」に向けて

学術研究都市の分散型地域核("ほたる")を生み育て、知の幅広い交流を促す場とする

「九州大学学術研究都市(仮称)」は、九州大学と糸島地域に分散配置される分散型地域核("ほたる")の研究施設等によって構成される。九州大学は分散型地域核("ほたる")が生まれ、育つ「知識の水源池」としての役割を果たす。リエゾンプラットフォーム、中核センター機能、レンタルラボ等を充実し、大学企業家(アカデミック・アントレプレナー)の支援、学産官民連携の場の形成を行い、知の交流・創造活動を進める。

地域との双方向交流によるキャンパスづくりと地域への貢献を進める

地域に開かれたオープンキャンパスとし、双方向交流をベースとして多様な地域との連携を深め、大学が地域に貢献するとともに、地域が大学を支える仕組みづくりを行う。

## (5) 「キャンパス間の連携に配慮した新キャンパスの創造」に向けて

キャンパス内ゾーン間の連携を円滑化する

キャンパス全体をまちとしてとらえ、各ゾーン間の機能分担と機能連携を図る。移動システムを整備し、日常的な出会いの空間を数多く用意することで、広大なキャンパスの中で部局間交流が円滑に行われるよう配慮する。

病院地区、筑紫地区との連携を強化する

新キャンパスは、病院地区、筑紫地区と、距離的に現在より離れることになるため、これらの地区との連携を強化するため、通信・交通の強化に併せて、本部・交流ゾーンや都心部に交流と連携の場を用意する必要がある。

新キャンパスと都心部の連携を確保する

新キャンパスの地理的条件を考慮すれば、大学の研究・教育機能を充実させる上で都心部にサテラ

イトを確保することが不可欠と考えられる。

## (6) その他

既成の概念や価値観等にとらわれない自由な発想を重視する

既成の概念や価値観にとらわれない自由な発想を重視し、キャンパスづくりの中で大学のあり方や社会に対する問題提起、新たな提案を行い、C.O.Eにふさわしい先進的で個性的なキャンパスを形成する。

## 2. 新キャンパスの立地条件と特性

### (1) アジアとの歴史的・地理的近接性

新キャンパスは玄界灘に囲まれた糸島半島にあり、地理的にアジア諸国に近く、わが国とアジアとの交流の発祥の地でもある。

### (2) 成長する福岡都市圏郊外に展開するキャンパス

新キャンパスは、福岡都心部から約15km、最寄り鉄道駅となる伊都地区から約4kmの距離にある。新キャンパスと伊都地区の新駅を結ぶ学園通線が新たに整備される予定である。

### (3) 恵まれた環境資源(自然・田園)の中の丘陵地に立地

新キャンパスは丘陵地に位置し、福岡市内でも有数の田園地帯と豊かな自然の丘陵地に囲まれている。周辺には自然海岸が残りリゾート環境に恵まれている。

### (4) 一つのまちに匹敵する広大なキャンパス

新キャンパス用地は南北約1.0~1.5km、東西約2km、面積約275haと広大で、生活の単位としてのまちに匹敵する広さを持っている。

## 3. 本部・交流ゾーンの基本概念 = 「タウン・オン・キャンパス」

九州大学は、「国際的・先端的な研究・教育拠点(C.O.E.)の形成」と「自律的に変革し、活力を維持しつづける社会に開かれた大学の構築」を基本理念として大学改革を進めつつあり、その理念を反映させた新キャンパス計画の基本的考え方をすでに明らかにしてきた。

それは、新キャンパスを含む糸島地域全体を21世紀のアジアをリードする学術特別区として整備することであり、それを通じて世界の発展に貢献できる九州大学学術研究都市の構築を目指すことでもあった。そうした理想を実現するうえで、彼の地はわが国とアジアとの交流を最初に拓いた地域であり、アジアとの交流の長い歴史と豊かな自然に恵まれた新キャンパスは、再び九州大学をアジア、ひいては世界の舞台に立たせるにふさわしいロケーションにあるといえる。

しかも、新キャンパスは生活の単位としてのまちに匹敵する広さを有している。こうした特性を有するキャンパスの周辺にまちを展開していく従来の手法を用いても、大学とまちの一体化は不可能に近い。快適な大学生活を担保することができないばかりでなく、新キャンパス計画に掲げられた基本的考え方を実現することも困難となる。

そこで、九州大学の新キャンパスづくりにおいては、大学の周辺にまちをつくるという伝統的な手法から転換し、大学の中にまちをつくり、大学がこれを取り巻く新たなキャンパスづくりを行う。大学とまちが融和し、大学そのものがまちであるという「まち大学」をめざすのである。

「まち大学」の中において、本部・交流ゾーンは、まちの多様な機能と豊かな空間を取り込んだ「ダウンタウン(まちの中心地区)」として位置づけ、キャンパス全体の研究・教育・生活をサポートするとともに、新キャンパスの求心力を高める役割を果たす。

すなわち、大学の顔としての機能、文理融合の教育・研究機能、国際交流機能、福利厚生機能のようなこれまでの大学に固有な機能ばかりでなく、従来大学の周辺に配置されてきた文化、交流、遊び・たまり場、交通、管理などの都市的機能が集積するゾーンとする。さらに、必要に応じて、地元の協

力を得ながらキャンパス周辺にまち機能を配置する。

こうした大学とまちの新たな一体化は、同時に大学と地域の連携を意味する。大学と地域が相互に信頼し協力し創意に溢れた工夫を重ねていくことによって、はじめて大学とまちは融和できるからである。それは、かつて都市の中から生まれてきた大学を再び地域の中に埋め戻しながら、新たな時代の大学像を模索する途でもあるといえよう。

本部・交流ゾーンづくりの基本にあるこうした考え方は、「タウン・オン・キャンパス」というコンセプトによって包括することが適切であろう。「タウン・オン・キャンパス」によってこそ、新キャンパス計画に掲げられた理念を実現に導き、九州大学の新キャンパスを21世紀におけるキャンパスづくりの先進モデルとすることにつながると考えられる。

#### 4. 本部・交流ゾーン(タウン・オン・キャンパス)づくりの6つの具体化戦略

本部・交流ゾーンは、21世紀のC.O.E.に相応しく、先進的で独自性をもった大学づくりと、地域との連携の核となる創造的空間を志向するとともに、「1. 本部・交流ゾーン検討のスタンス」で整理した各項目を実現し象徴する空間としての「タウン・オン・キャンパス」の概念のもとで、以下のような具体化戦略を検討する。

##### (1) C.O.E.を象徴する「九州大学の顔」をつくる。

大学の玄関口づくり

本部・交流ゾーンは、来訪者がまず最初に目にする九州大学の玄関口となる。したがって本部・交流ゾーンは九州大学のイメージを決定づけることになるため、九州大学が目指すC.O.E.を象徴する景観と機能を備えた空間づくりを目指す。

日常的な国際交流の仕掛けづくり

本部・交流ゾーンは、大学の玄関口であるとともに、各種機能が集積し多様な人々が行き交う場である。国際交流のための機能や留学生の居住施設を整備することにより、国際交流を限られた場や人々に限定するのではなく、全ての大学人や地域の人々が日常的に国際交流ができる空間とする。

多様な顔と魅力を有する空間づくり

本部・交流ゾーンには、大学本部・情報発信機能、集客・大学文化機能、ランドマーク機能等を配置し、九州大学の独自性や先進性、開放性、学問の府としての風格などが感じられる多様な魅力を有するC.O.E.を象徴する空間(九州大学の顔)とする。

・高まりのある空間と余裕のある空間、にぎわいの空間と静かな空間

・風格のある空間と親しみやすい空間

・将来の新たな機能のための余地確保

・大学の顔の早期整備、県道両側の景観整備

##### (2) 九州大学を体現し共有できる空間をつくる(教育と研究のパラダイムシフトを支える仕掛けをつくる)

キャンパス市民の主役である学生に焦点を当てた仕掛けづくり

キャンパス市民の主役としての学生に対して、九大で催される学会・国際会議の補助等の多様な参加の形式、学生を巻き込んだ多様な地域連携プログラム、自主的・先行的試行を受容し、かつサポートする柔軟な制度的仕組みなど、知的刺激を享受できる広範な仕掛けを用意して、優秀な学生を全国・アジアから吸引し少子化時代に対応する。

学内の定住人口が生まれ出すキャンパス・コミュニティの形成

本部交流ゾーンを中心に学生居住施設を配置し、学習者コミュニティを形成する。ボリュームのある定住人口が生まれ出す多様なコミュニティと自主的活動が交錯集積する横断的空間が生まれ出す教育的価値を重視する。

思考と生き方のリセット(癒し)、バージョンアップ(飛躍)の環境づくり

近年の学生は、受験戦争に埋没し、創造的思考・活動や集団の中で自己を主張することなどが苦手な若者が多い。このような新入生に癒しの機会を与え、飛躍の契機となる期間や空間づくりが必要である。そのためには、学生居住施設や本部・交流ゾーンのその他の施設を活用・連携させて、ほっとし、くつろげる空間づくり、何かをやってみたいという気を起こさせる空間づくりが不可欠である。そうしたゆとりと刺激のある空間づくりが新たな文化のインキュベーターとしての機能を持つことにつながる。

#### 教職員の媒体・触媒機能を高める

教職員は大学の一方向の主体であるとともに、知の媒体・触媒メディアである。教職員の大学生活を快適・豊かにすることはもちろんのこと、「たむろ」できる仕掛けづくり、居住も含めて教職員の息づかいが感じられる仕掛けづくりを行うことで、知の媒体・触媒機能を高める。

#### 生涯学習機能を重視する

社会人の再教育を充実するための生涯教育、生涯学習機能を強化する。

・学生の自己実現を促す機会・仕掛け

- ・身体を動かし楽しむことで癒される空間、歩いて楽しい回遊空間、出会える空間
- ・ヒトの流れと溜まりがある空間、群れ隠れることのできる空間
- ・目的・ニーズのない人も楽しめる空間、多世代の参加する空間
- ・学生居住施設、及び本部・交流ゾーンのその他の施設の活用と連携
- ・大脳新質（論理思考）だけでなく大脳旧質（全体思考、感性思考）も刺激し、育てる教育
- ・教職員の知の媒体・触媒メディア機能を高める空間
- ・社会人の再教育を充実するための生涯教育、生涯学習機能を高める空間

### (3) 学術研究都市の拠点空間をつくる

分散型地域核("ほたる")が生まれ育つ「知識の水源池」の架け橋づくり

九州大学は分散型地域核("ほたる")が生まれ、育つための知識の水源池として機能しなければならない。本部・交流ゾーンは水源池に集まる"ほたる"が、相互に刺激を与え合う架け橋(インターフェース)としての役割を果たす。

#### 教職員の交流の空間づくり

新キャンパスの各ゾーン間、病院地区・筑紫地区の教職員が相互に交歓できる空間を整備する。これらの日常的な交流が横断的学術研究の萌芽と発展の基盤を形成する。また、他大学との連携・交流の場として活用する。さらに、情報ネットワークの推進により、本部・交流ゾーンを中心にした大学全体の一体感を増幅する。

#### 他大学との学術連携

九州大学以外の大学との交流を促し、学会事務局の機能を集中するなど、学術連携のための空間を整備する。

#### 広範な団体・人との連携、新たな仕組みの創出

学術研究都市づくりは、地元経済界、産業界、行政、地域市民等の広範な団体・人との連携の中で検討・協議を進めるとともに、密接な連携を維持しながら具体化を進める。また、学術研究都市の運営については、上記団体等との連携の中で新たな仕組みづくりを検討する。

・企業家支援、産学連携の場の形成

- ・研究開発施設の誘導
- ・研究開発支援施設、交流施設の整備
- ・アカデミックゾーンとの連携
- ・学会関連施設の整備
- ・九州大学学術研究都市推進協議会との連携
- ・「九州大学学術研究都市(仮称)」自治運営機構の整備

### (4) 大学生生活を支援する仕掛けをつくる

学生・教職員の大学生活のサポート空間づくり

本部・交流ゾーンはキャンパスの中心に位置するとともに、主要アクセスルートにあたるため、学

生や教職員が毎日通過し一定の時間を過ごす最も利用しやすい空間となることから、学生・教職員の大学生生活をサポートする多様な機能を配置する。また、キャンパスが広大なことから、従来大学周辺のまちに頼ってきた日常の大学生生活を支える機能を、大学の中心部にあたる本部・交流ゾーンに配置することで、大学の郊外移転によるデメリットを補い、新たなメリットを生み出す。

#### 地域との共同利用の仕組みづくり

本部・交流ゾーンの各種機能を地域との連携の中で整備することはもちろんのこと、地域との共同利用の仕組みづくりを検討し、地域に開かれた空間とすることで、周辺地域に貢献するとともに、利用効率を高め多様な機能の成立を可能にする。

#### 施設の整備・運営主体の多様化

大学だけでは整備が困難な機能や、グレードが低くならざるを得ない機能に関して、地域や民間等と連携しながら、大学生活に必要な多様な機能、様々なグレードの機能を配置する。また、各種機能の運営に関しても地域や各種団体との連携を進め、より効率的な運営を行うことで、学生・教職員をはじめとする利用者に対するサービスを向上する。

・アカデミックゾーン内の4箇所(学生)の溜まり場として配置されるゾーンコア施設(福利厚

生施設+事務施設+講義施設+情報学習施設等)とのネットワーク化

・ショッピングセンター等の民間施設の誘導

・民間資金の導入、民間施設等の活用

・医療施設(プライマリー・ケア、研究の実践、地域健康づくり)の配置

・セキュリティ、緊急時対応の検討

・糸島地域における学生のための様々なジョブの創出

・キャンパス・ハローワーク・ネットワークの整備

・留学生への経済的サポート・システム

・キャンバスマネーを導入し循環させる

・駐車料金の徴収と有用な活用による安全管理

### (5) 地域連携・市民連携の仕掛けをつくる

#### 学産官民の連携の仕掛けづくり

本部・交流ゾーンを中心に、研究を核とした産学連携だけでなく、教育を核とした大学・地域・市民連携を行う。地域との連携に基軸をおいた新たな大学モデルとし、従来の産学官連携に地域も加えた学産官民の連携した大学モデル、九大のアドバンテージを生かした大学づくりを行う。

#### 人・ソフトの相互交流を強化

学内組織と学外組織(同窓会、経済団体、行政、地域等)の連携・再構築を深め、人・ソフトを相互に交流させることにより、新しい知的生産の場づくりを進め本部・交流ゾーンに根づかせ生かす。

#### 地元への貢献

本部・交流ゾーンにおける連携・交流を核にして、生涯学習の機会の増加、雇用機会の創出、商業施設利用等による利便性の向上などを通して地元へ貢献する。

#### 大学に関連したさまざまなアクティビティへの参加

アカデミック・ボランティア(大学人による地域サポート、地域顧問学者)、市民ボランティア(市民による大学サポート)、大学の杜マイスター(地域と大学の専門家を中心とした自然環境の維持管理)、これを支える様々なコミュニティトラスト運動等の展開が期待される。

#### シンボリックで知的刺激あふれる空間づくり

本部・交流ゾーンに配置するユニバーシティ・ミュージアムを開放するとともに、中央図書館の一般利用を促進し、シンボリックで知的刺激があふれる空間づくりを行う。このような知的刺激あふれる空間づくりを本部・交流ゾーンを核として全キャンパスに展開する。

・新しい知的生産の場づくり

・ユニバーシティ・ミュージアムの開放

- ・中央図書館の一般利用促進
- ・空間を生かすソフトと人における地域との双方向交流
- ・学内組織と学外組織の連携強化
- ・地域の側が大学に入ってくる場をつくる
- ・アカデミック・ボラティア制度、シヴィル・ボランティア制度を生み出す
- ・九大版緑の赤十字社（地域のボランティア）

## （６）観光名所空間をつくる

観光目的となりうる空間づくり

自然景観を生かすとともに、エポックとなるような優れた建築物や美しい並木などを創出し、九州大学のキャンパスそのものが糸島地域や福岡を訪れる観光客の目的地の一つになるとともに、地域の人々も散策や休息の場として利用できるような空間とする。

歴史を積み重ね輝きを放つ空間づくり

本部・交流ゾーンは、歴史を積み重ねることによりますます輝きを放つ景観と環境の中心地区とし、九大の新たな歴史を創り、後世に残る装置として機能させる。

愛校精神を育む空間づくり

上記２つの空間づくりをとおして、本部・交流ゾーンを学生・教職員の誇りの一つとすることで、九大の愛校精神を強固にしていくことにつなげる。このような九大キャンパスのイメージを全国に発信し、浸透させることで、全国から幅広い受験生を集める一方策とする。

・学外の人を訪れたい空間、九大のイメージを全国に発信できる空間

- ・九大人の誇りとなる空間、愛校心を育む空間
- ・利便性の高い空間（交通結節機能）
- ・伊都から九大までの散策ルート
- ・九大哲学の小道
- ・サイエンス的要素、学習空間、環境共生の重視による社会見学の空間

## ５．学生の居住施設の基本コンセプト

学生の勉学と生活支援のための低廉な居住施設の提供というこれまでの概念にとらわれない新しいスタイルの居住施設が必要である。時代や学生の質の変化に対応でき、「九州大学新キャンパス計画の基本的考え」を実現できる先進的な居住スタイルを志向して、以下のようなコンセプトを設定する。

### （１）九州大学を体現し共有できる空間をつくる（研究・教育のパラダイムシフトに対応する）

大学院大学にふさわしい研究支援機能、国際人養成機能（インターナショナル・ハウス）を併せ持つ、学生居住機能の整備を検討する。

新たな研究・教育システムと連携させながら、学生居住施設を活用した教育の可能性や内容、及び手法を検討し、九州大学の先進性・独自性を体現し共有できる重要なツールの一つとする。

### （２）多様なニーズに対応させる

低廉ではあるが必要最小限の広さしかない従来型の学生寮から、民間マンションに近い広さや設備を持ったある程度高額の居住施設まで、学生のニーズに対応した多様な居住形態を用意する。

キャンパス内における配置は、アクセス性、居住性、将来の拡張可能性を考慮して、「本部・交流ゾーン」及び東部の「交流ゾーン」を学生の居住施設用地とする。また、東部の「交流ゾーン」については、インターナショナル・ハウス、アジア館、韓国館などの展開に配慮して、交流ゾーンを「国際交流ゾーン」とすることが適当である。

### (3) 思考と生き方のリセット(癒し)、バージョンアップ(飛躍)の装置とする

核家族化、受験戦争などにより、他者や社会とのコミュニケーション能力に乏しい学生、自発的行動ができない学生、想像力、独創性に乏しい学生が多くなっている。

大学教育が機能すべき前提条件として、これらの学生に癒しの機会を提供し、飛躍の契機となる期間や装置が必要になっている。留学生は異文化の中でストレスにさらされる機会が多いことに対して十分なケアが必要とされる。

学生をケアし、学生が本来持っている能力を引き出すため、思考と生き方のリフレッシュ・リハビリが可能な、群れ、出会う空間、ほっとできる空間、知的刺激のある空間を居住施設の内外に整備する。

### (4) 定住人口を創出し、居住者コミュニティをつくる

学生の居住施設を整備することにより、定住人口を創出し、キャンパスの賑わい、セキュリティ、キャンパス経済圏を支える人的資源等を確保する。また、居住者コミュニティを形成し、社会参加の初歩段階として、キャンパスの管理や運営にも学生の参画を促す。

### (5) その他

- ・学生の居住施設の運営にあたっては、学外の財団等への委託も検討する。
- ・移転時期にニーズの高い大学院生用住居を重点的に整備する。
- ・従来型の寮施設も含めた現在の規模を基礎として、留学生数、入居率、学生のニーズ等を見極めながら、段階的に整備する。

## 6. おわりに

本部・交流ゾーンと学生の居住施設について、以下のような課題があげられる。

- ・本部・交流ゾーンの早期整備、県道両側のバランスある開発、施設密度、セキュリティー確保
- ・居住施設の将来拡張への配慮 - 調整池の跡地利用等
- ・九州大学学術研究都市推進協議会との調整
- ・新たな大学像の提示・情報発信の重要性(文部省・県・市・九経連へのインセンティブ)
- ・大学の限界の確認と推進協議会に対する協力の要請
- ・モデル・プロジェクトの選択と推進体制
- ・科学研究費プロジェクトあるいはP&Pによる立ち上げ
- ・新たな大学づくりプロセスへの学生の参加、たとえばC&Cによる立ち上げ
- ・NPOなどによる事業組織の立ち上げ
- ・キャンパス市民のクオリティ・オブ・ライフ向上
- ・キャンパス経済プラン、キャンパスマネーの運営の検討



